



安らぎの中

中村 京
(兵庫)

このごろの私
熾した切炭を火鉢に入れて
鉄瓶を掛ける。鉄瓶で湧かし
白湯は田やかで口当たりが良
く、その白湯で点てる抹茶や
淹れるコーヒーの味は言うま
でもない。食後のひとときを
楽しんでる。

数へ日の理髪店からイケメンとなりし少年はにかみ出で来

あかつきに秋明菊の綿毛はも雪おくやうにしろじろとあり

アスファルト舗装し終へる峡の道ライン際立てて街へと続く

明けの春を祝ふ九谷の盃で和酒酌み交はす下戸なるふたり

お帰りといつも言つてくれるからイチイの木陰は速度を落とす

この辻を左に折れてひたすらに走りき里の野帰りの道

ゆびさがしが財布の中で迷走しやつと千円能登への募金

冬空を映す小流れいと清ら 動くでないぞ山崎断層

〈経〉よりも宮柵二作詞「朱鷺幻想」かけてあげよう姑の命日

臘梅の小枝をかざるキッチンの香りの外は寒中の雨

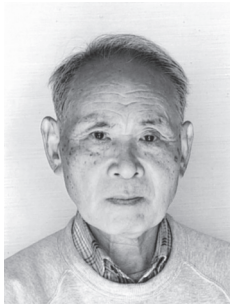
くるくると黄色の傘をまはしつっつ少女が帰る安らぎの中

琴柱裏ことぢにのこるわが名の筆跡は生真面目な父の手に成る楷書

目覚ましの四時の設定たしかめて「あんたが頼り」と枕辺に置く

生け垣のさざんくわの花散らすかぜ箒となりて花びらを掃く

あら不意に春の香りに呼ばれたり角の花屋の八重の水仙



暮れてゆく街

福島健太郎

(神奈川)

このごろの私
結婚した頃、職場では「同一賃金同一労働」が言われ出し、退職後の今も「同一労働」を守って、過ごしている。他には、ついうたた寝をしていることが、以前よりも多くなり、少し困っている。

風景の浸食されゆく夕まぐれ杖つく老爺の浴けだしてゆく

暮れなごむ騒音の街あてどなく歩けど迷ひコンビニには灯

寒き夜の孤独にたふる感傷に抗ふためにおでん食みたし

店を出て段差に思はずよろけをり明日には転ぶこともあらむか

門灯の切れぬままに出でしことふと思ひたり星見えぬ空

また思ふ古き換気扇の交換を為せども妻は気づかぬことを

近ごろは顔も洗はず朝食をとることのある 秘して言はねど

ことさらに言ふべき事にはあらねども妻のボイルド・エッグはかた茹で

いやましに時の弛びてまだ昼と思ふことあり、もう夕べとも

ひとの居ぬ静かな京を歩かむと思へどかなはず嵐電を降る

幻想を見つつ旅する嵐山きさらぎの朝、霧にとざされ

まだ寒き二月といふにTシャツの白人もゆく渡月橋の交

旅に出て金をパツパとためらはず使はば愉快といつも思へり

国外の旅にと買へるキャリーバッグ一度使ひて仕舞ひそのまま

ゴミ出しのミッション残し朝早くバスツアーへと連れあひは発つ